今週の
倫理

2025. 8. 23～8. 29

8月のテーマ　｜　苦難福門

1452号

社長として奮闘する日々の中で夫と社員の支えに気づいた

純粋倫理の基本テキストである『万人幸福の栞』第二条「苦難福門」には、苦難がなぜ起こるのか、そして苦難の迎え方や処し方について詳しく説かれています。

苦難は、不自然な心を抱き、無理な行ないをしたときに現われるとされています。しかし、自分の力ではどうにもならない苦難もあります。たとえば、天災や生まれる以前の家庭環境などです。苦難を契機として、これまでの生活を振り返り心の持ち方を改めることが、成長へとつながるのです。

今週は、不動産会社を営むA子さんの事例を紹介します。この会社は、創業者である夫が社長を務め、A子さんも夫を支える仕事をしていました。ところが、会社の拡大を図っていた矢先、夫が病に倒れ四十八歳の若さで亡くなってしまったのです。

A子さんは、「会社を継続するか否か」という重大な決断を迫られました。〈夫の会社を残したい〉と思うものの、事業を後継できる人はA子さん以外にいません。そこで〈夫の遺志を継ぐのは自分しかいない〉と決心し、A子さんは自ら社長となり、会社を存続させる道を選んだのです。

とはいえ、A子さんは引っ込み思案な性格であり、〈自分に社長が務まるだろうか〉という不安が先立っていました。そんな折、友人から『職場の教養』を紹介されたことがきっかけに、倫理法人会に入会しました。

経営者モーニングセミナー（以下、MS）に参加すると、A子さんは会員から盛大な歓迎を受けました。そして、参加者が真剣に学ぶ姿を目の当たりにし、〈自分を変えたい〉という強い思いが芽生えたのです。

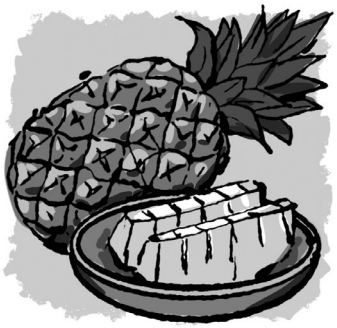
それ以来、〈明朗になる〉ことを目標に掲げ、毎週欠かさずMSに参加しました。すると、様々な役割を任されるようになり、それを喜んで引き受けました。人前で話す機会も増え、自分の気持ちを正直に伝えられるようになり、自信がついていったのです。そしてその変化に呼応するかのように、会社の経営も上手く回り始めました。

倫理実践によって積極性が身に付き、会社が良くなっていくことを実感していたある日、A子さんは講師から厳しい指摘を受けました。「会社が順調なのは、あなただけの力ではありません。よく考えてください」と言われたのです。その瞬間、A子さんの心に蘇ってきたのは生前の夫の姿でした。

朝一番に出社し、率先して清掃をしていた夫は「会社を地域一番にしたい」と夢を語っていました。そんな夫から受け継いだA子さんは、会社を自分の力だけで成長させたかのように思い込んでいたのです。

それに加えて、A子さんは、突然社長がいなくなったにもかかわらず、愚痴一つ言わず懸命に働いてくれた社員たちのお陰で、会社が存続できていることに気づきました。〈夫に先立たれて大変な時期を、社員が支えてくれたからこそ、今の会社があるのだ〉と、感謝の気持ちはいっそう深まりました。

現在、地域で一番の会社となり、社員はイキイキと働いています。〈夫も笑顔で見守っている〉と、A子さんは実感しています。



え・城谷俊也